

2016年8月28日

横山信幸

## 大阪哲学同好会 31 「マクタガート時間論」 レジюме

### I. 時間の非実在の論証

- 時系列を A・B・C の 3 系列に分けて考える。
- そのうち、A 系列が時間の本質であり、時間に不可欠である。そのため、時間が実在するには A 系列の実在が必要である。
- ところが、A 系列は矛盾していて、実在しない。
- だから、時間は実在しない。

### II. A・B・C 系列の意味

時間の要素：「現在性」「変化性」「向き」「並び順」の 4 点
A 系列：時間を「現在・過去・未来」の視点で分析する時系列 「現在性」「変化性」「向き」をもつ
B 系列：時間を「以前・以後」の視点で分析する時系列 「並び順」「向き」をもつ
C 系列：C 系列：時間を並び順だけで分析する系列 「並び順」のみ

### III. A 系列の矛盾証明

- (1) 現在・過去・未来は両立不可能である。
  - (2) いかなる事象も、現在・過去・未来のすべての特性を併せ持つ。
  - (3) ゆえに現在・過去・未来の系列である A 系列は矛盾する。
- 現在・過去・未来が両立不可能なわけ
  - 現在・過去・未来が両立しないとダメなわけ
  - 矛盾に対する反論
  - 現在で「あり」、過去に「なるだろう」し、未来で「あった」はただ、それらが同時にあるときに両立できないだけ
  - この説明は悪循環を含んでいる。
  - 反論に対する反論への批判
  - 二つの両立不可能な述語が同じ一つの存在物にあてはまる、という場合が可能である。  
(ダメット「マクタガートの時間の非実在証明を擁護して」より)
  - 反論の無限後退

### IV. A 系列が時間の本質であるわけ

- (1) 時間は変化が伴わなければならない。
- (2) A 系列がなければ変化がない。
- (3) ゆえに、A 系列がなければ時間はない。

- シューメーカー「変化のない時間 Time Without Change(1969)」
- A 的变化と B 的变化

A 的变化	B 系列の 2 時点の差異だけでは表せないような、何かがあるに「成り替わる」こととしての、本質的な変化。
B 的变化	B 系列の 2 時点の差異があること

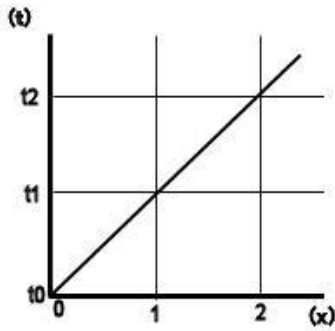


図 1

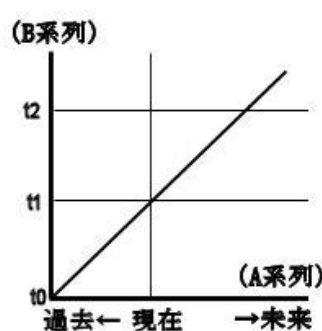


図 2

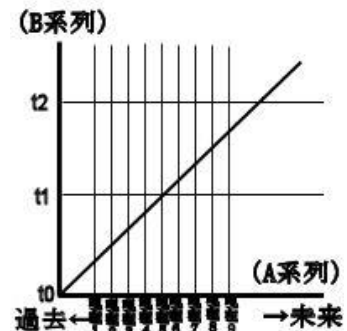


図 3

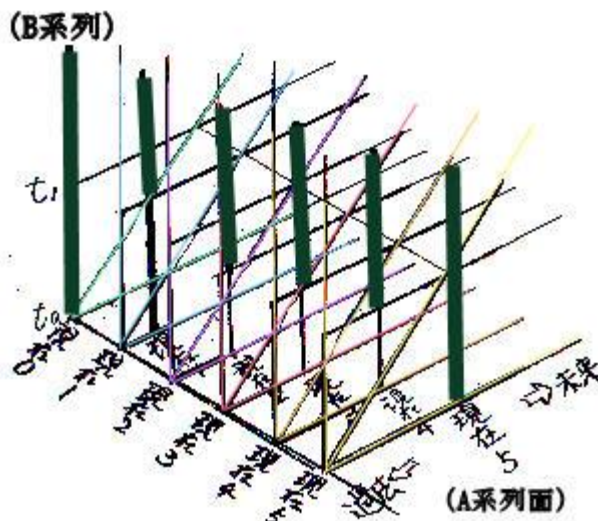


図 4

- 「見かけの現在」説 ウィリアム・ジェイムズ (William James)
  1. 過去として与えられている「明白な過去」
  2. 現在として与えられている直近の過去と直近の未来の複合としての「見かけの現在」
  3. 未来として与えられている「明白な未来」
- 「遅れてくる意識」説 ベンジャミン・リベット
- 「この今現在 the present」

V. A 系列論

A 系列的な時制 (テンス) [「だった」「であり」「になる」] は「書き換え」によって消し去ることなどできない原初的で根源的なものであることを忘れるな

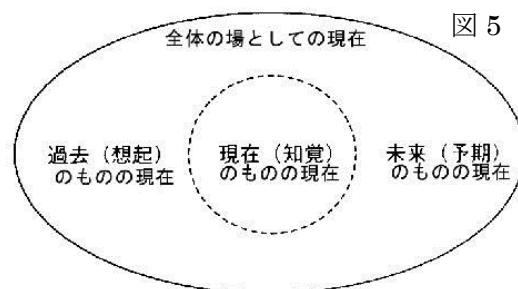


図 5

VI. B 系列論：B 系列の「現在」とは発話と同時にいうこと

- エントロピーと記憶

VII. 入不二「2 種類の差異を反復する「である」」説

①【かつて未来であったことが、今は現在であり、やがて過去になる】——時制表現



②【「かつて未来であったことが、今は現在であり、やがて過去になる」のである】——無時制表現



③【無時制的な『である』という表現行為も、かつては未来であったが、今は現在であり、やがて過去になる】——時制表現



VIII. 永井「累進構造説」

① 他と比較不可能な世界存在のレベルの〈今〉と、他者と比較可能なレベルの累進構造の最上段としての〈今〉とが、交換可能であること

② 他者と比較可能なレベルの累進構造の最上段とその下の各段の〈今〉とが交換可能であること

という 2 つの交換可能性による累進構造によって、極限の貧しさしか持たないはずの言語にもっとも豊かな認識を語らせ得るようにするシステム

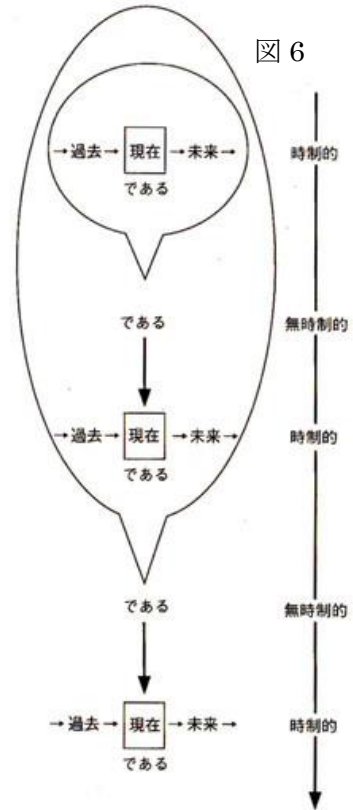


図 6

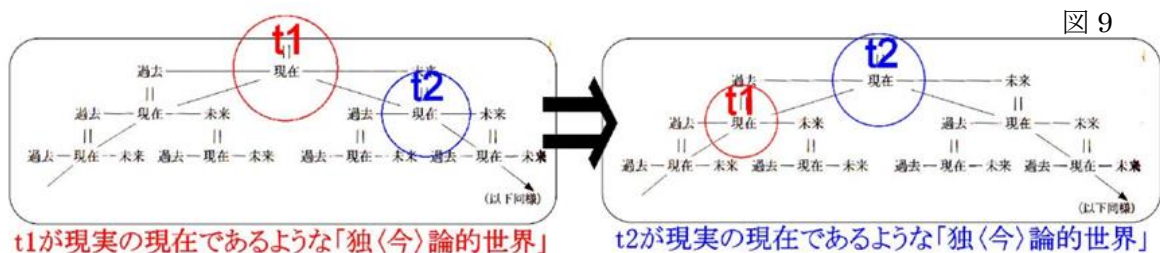
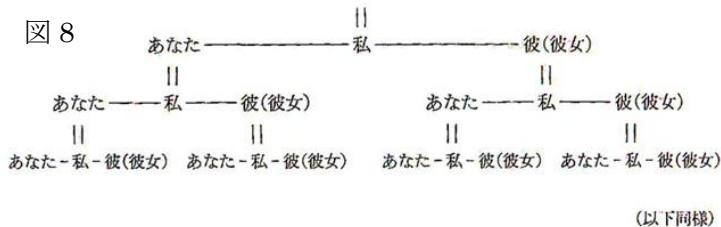


図 9

t1が現実の現在であるような「独〈今〉論的世界」

t2が現実の現在であるような「独〈今〉論的世界」

現実性アクチュアリティなレベルの感覚的確信
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 個別</li> <li>● 今ここでこの私にとっての○○</li> <li>● クオリアがある</li> <li>● 対比できない</li> <li>● 分析できず語り得ない</li> <li>● カント用語で「現実的」</li> <li>● 現実的様相</li> <li>● 必然的様相</li> <li>● もっとも豊かな知覚</li> </ul>

実在性リアリティなレベルの感覚的確信
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 一般</li> <li>● 誰にとっても○○の視点に立てば○○</li> <li>● クオリアは乗らない</li> <li>● 対比できる</li> <li>● 分析して語り得る</li> <li>● 「実在的」</li> <li>● 可能的様相</li> <li>● 偶然的様相</li> <li>● もっとも貧しい真理</li> </ul>

図 10 ヘーゲル「感覚的確信」

入不二による「時間の非実在性」の「実在」の意味

(1) 本物性  
(2) 独立性  
(3) 全体性  
(4) 無矛盾性  
(5) 現実感

現実的でアクチュアルな〈私〉〈今〉	累進構造のてっぺんとしてのアクチュアルな〈私〉〈今〉	累進構造 2 段目以降のリアルな「私」「今」
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 個別</li> <li>● 今ここでこの私にとっての○○</li> <li>● クオリアがある</li> <li>● 対比できない</li> <li>● 分析できず語り得ない</li> <li>● カント用語で「現実的」</li> <li>● 現実的様相</li> <li>● 必然的様相</li> <li>● もっとも豊かな知覚</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 個別であり一般でもある</li> <li>● 今の私にとっての○○</li> <li>● クオリアがある</li> <li>● でも対比できる</li> <li>● でも「現実」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 一般</li> <li>● 誰にとっても○○の視点に立てば○○</li> <li>● クオリアは乗らない</li> <li>● 対比できる</li> <li>● 分析して語り得る</li> <li>● カント用語で「実在的」</li> <li>● 可能的様相</li> <li>● 偶然的様相</li> <li>● もっとも貧しい真理</li> </ul>

図 11 永井「累進構造」

5.6331 視野は決してこのような形はしていない（「論考」）

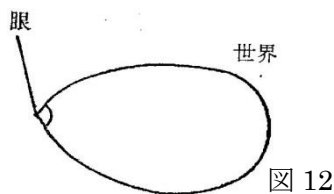


図 12

- 「現在としての現実性」と「質感としての現実性」



自身の写像形式を写し取ることはできない

図 13

IX. 反実在論的時間論と矛盾のない生

- 「或る正当な物理則に則った世界において、時空間のあらゆる地点で共通の世界を見ることができる」という仮説を立てたうえで  
『質感としての現実性』を共有しながら違う立場でものが見られるとする  
とする冒険的な言語設定をする

<http://sets.cocolog-nifty.com/blog/151.html> 「時間と生は非実在か〈独今論者のカップ麺〉」